

障がい者スポーツイベントの学生への教育的効果 ー障がい者に対するイメージの変化及びコミュニケーション能力への影響ー

西垣 景太・上田 ゆみ子・藤丸 郁代・伊藤 守弘

1 はじめに

一般的に、健常者の障がい者に対する意識や態度は否定的であり偏見を抱いていると考えられているが、障がい者に対する意識や態度が肯定的なものへと変化するためには、情報の提示のみならず、直接的な接触の機会が効果的であるとされている（川間，1996；山内，1996；齋藤，2008）。

障がい者スポーツの機会の増大という視点から松本・田引（2009）は、パラリンピックやスペシャルオリンピックスなどが開催される一方で、実際に地域における障がい者スポーツはサポート体制が不十分であると指摘している。

地域における障がい者スポーツ振興は、障がい者自身が社会参加の一步を踏み出す場の創出と、共に暮らす地域の人々があるのままの実物大の障がい者に接して触れ合える場であり、支えるスポーツ活動への参加によって、障がい者を理解・受容する好機とすることができるとしている。

今回、中部大学において障がい者スポーツイベント「心をつなごう！スポ・レクチャレンジ」を開催した。本イベントは、愛知県障がい者スポーツ指導者協議会の主催で行われたものであり、本学での開催という事もあり、本学学生がボランティアスタッフとしてイベントの運営を担った。本イベントでは、障がい者の「嬉しい・楽しい・もっとやりたい・みんなで一緒に」など、これらを皆が共に感じながら時を過ごすことを目指して行われた。事前準備や当日の運営など、参加学生が主体的に進めるかたちで行った。学生たちは運営を担うことにより、自分たちの思いをイベントに込めることができる。しかし、一方でイベント終了まで安全面を含めた運営に社会的責任を負うこととなる。

現在の大学には、1単位45時間の学修時間の保証、学生の問題発見・解決能力を育成できる授業開発、結果としての「学士力」「社会人基礎力」などが求められている。しかし、それらはキャンパス内の机に向かった学習だけでは育成が難しいのではないかと考える。それは、むしろキャンパス外でのボランティア活動、インターシップなど、これまで多くの場合に正課外とされてきた活動の中に可能性があるのではないかと考え、その現実的効用を知りたいと考えた。そこで今回

は、障がい者スポーツに関った学生の意識の変化とコミュニケーション能力への影響を調査した。特に、コミュニケーションを積極的に行うことができるかは、コミュニケーションに対する意欲と対象を理解しようという気持ちが重要であると考えられる。普段接する機会の少ない障がいのある人とスポーツイベントを通してコミュニケーションを図ることによって、積極的なコミュニケーションの意欲が向上するのかを検証する。

さらに、本検討を基に大学教育とボランティア活動の関係について、この活動が大学での学習とどのように繋がったか、大学での学習が現実に役に立っているかなど、学生の成長への影響を明らかにすることへの一步となることを期待する。

2 方法

2.1 調査対象者

2010年の12月に開催された、障がい者スポーツに関する企画であるスポレクチャレンジに学生スタッフとして参加した5学部の34名の学生であった。事前調査の回答者は30名、事後調査の回答者は34名であり、事前・事後の調査において不備があった者を除き、29名（男性20名、女性9名）を有効回答（有効回答率88.2%）として分析を行った（1年生11名、2年生7名、3年生9名、4年生2名）。なお、本調査の分析に際しては、調査対象者が少数であるため、分析の信頼性を損なわないよう学部など属性の違いによる分析は行わず、一つの集団として事前と事後による分析を行った。

2.2 調査手続き

調査は企画の前後2回実施した。事前調査は、事前に打ち合わせガイダンスを行った際に、調査の概要、記入方法等について説明を行い、一斉法により実施し、その場で回収した。事後調査は、企画の片づけ終了後に事前調査と同様に調査を実施した。

倫理的配慮として、調査への参加は自由意思であり、参加を拒否したことによって不利益や成績等への影響は生じないことを口頭で説明した。

2.3 調査内容

2.3.1 障がい者スポーツのイメージについて

障がい者スポーツに対するイメージについて、吉岡ら（2008, 2010）の質問項目を参考に肯定的イメージと否定的イメージを対にした形で10項目設定し（例：障がい者スポーツでは技術向上は望めないー技術向上も望める）、否定的なイメージを「1」、どちらともいえないを「3」、肯定的なイメージを「5」として1から5までの5段階評価を得点化し分析を行った。

2.3.2 障がい者に対するイメージや関わり方について

障がい者に対するイメージについて、松本ら（2009）・田中ら（2004）・松村ら（2002）の質問項目を参考に肯定的イメージと否定的イメージを対にした形で10項目設定し（例：障がい者は性格が暗いー明るい）、否定的なイメージを「1」、どちらともいえないを「3」、肯定的なイメージを「5」として1から5までの5段階評価を得点化し分析を行った。

2.3.3 コミュニケーションの有能感について

コミュニケーションに対する意欲を測定するため、町田（2009, 2010）の研究で用いられたコミュニケーションの有能感に関する質問項目22項目のうち、因子分析（町田, 2010）によって得られた4因子19項目を本研究において用いることとした。第1因子は、自ら積極的に人と関わり明るい雰囲気を作っていく行動特徴に関する内容の「社交性因子」6項目（項目例；誰とでもうまくやっていくことができる）である。第2因子は、相手の気持ちや周囲の状況に意識を向けることに関する内容の「相手志向性因子」6項目（項目例；話している相手の気持ちのちょっとした変化を感じる）である。そして第3因子は、コミュニケーションの送り手として考えや感情を表現できるかどうかに関する内容の「自己表現因子」4項目（項目例；自分の意見や考えをわかりやすく人に伝えることができる）である。最後に第4因子は、傾聴の姿勢を表す内容の「傾聴因子」3項目（項目例；適度なあいづちを打つことができる）で構成されている。それぞれの項目に対して、「1. あてはまらない」から「4. あてはまる」までの4件法で回答してもらい得点化し、4因子の合計点ならびに総合点を用いて分析を行った。

3 結果

3.1 障がい者スポーツに対するイメージの変化

もっとも平均値が高く肯定的なイメージを持っていた項目が「スポーツを行う意味がないーとても意味の

ある」（ $M=4.97$, $SD=.186$ ）で、もっとも平均値が低く否定的なイメージを持っていた項目は「スポーツを行うのは難しいことー簡単なこと」（ $M=2.66$, $SD=.936$ ）であった。この項目のみが障がい者スポーツに対する否定的なイメージを抱いていることが明らかになった。企画の前後で障がい者スポーツに対するイメージがどのように変化したかを検討するために対応のあるt検定を行った。その結果、「スポーツを行う意味がないーとても意味がある」「スポーツをやるべきではないー積極的にやるべきである」「健常者が一緒にやるものではないー一緒にできると思う」の3項目で前後での有意な差は認められなかった。その他、7項目においては有意差が認められ、企画前よりも企画後の方が、イメージが肯定的に変化していることが明らかになった。

有意な変化が認められなかった項目は、企画前の調査から肯定的なイメージが強いと評価していた上位から3項目であったため、それ以上の肯定的な変化は認められなかったと考えられる（表1）。

表1 障がい者スポーツに対するイメージの得点変化

	1	2	3	4	5		事前	事後	t値	p値
大勢では楽しめない						大勢でも楽しめる	4.45	4.86	2.46	.02*
技術向上は望めない						技術向上もある	4.45	4.69	2.25	.03*
見てもつまらない						おもしろそう	4.24	4.76	4.05	.00**
スポーツを行う意味がない						とても意味がある	4.97	4.97	0.00	1.00
スポーツを行うのは危ない						危なくはない	3.00	3.79	3.83	.00**
できることが限られてしまう						工夫すれば色々できる	4.24	4.76	2.35	.03*
スポーツを行うのは難しいこと						簡単なこと	2.66	3.62	5.74	.00**
スポーツをやるべきではない						積極的にやるべき	4.59	4.66	0.35	.73
スポーツをする環境が作れない						環境を作ることができる	3.93	4.45	2.56	.02*
健常者が一緒にやるものではない						一緒にできると思う	4.69	4.86	1.15	.26
							0.60	0.58		

◆ 事前 ■ 事後

上段:M, 下段:SD * $p < .05$, ** $p < .01$

3.2 障がい者に対するイメージの変化

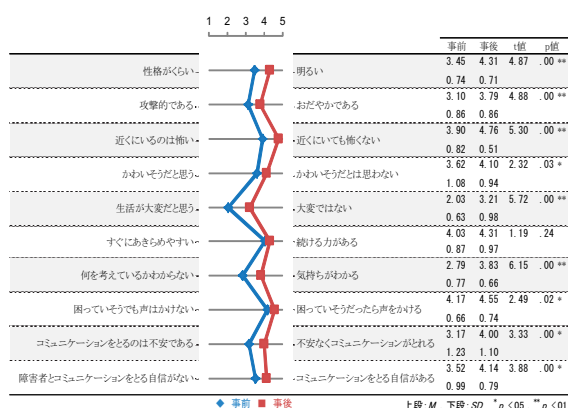
もっとも平均点が高く肯定的なイメージを持っていた項目が、企画前では「困っていそうでも声はかけないー困っていそうだったら声をかける」（ $M=4.17$, $SD=.658$ ）で、企画後は「近くにいるのは怖いー怖くない」（ $M=4.76$, $SD=.511$ ）であった。もっとも平均値が低く否定的なイメージを持っていた項目は、企画前後ともに「生活が大変だと思うー大変ではない」（企画前； $M=2.03$, $SD=.626$, 企画後； $M=3.21$, $SD=.978$ ）であった。その他、「何を考えているかわからないー気持ちがわかる」では否定的なイメージを抱いていることが明らかになった。

企画の前後で障がい者に対するイメージの変化を検討するためにt検定を行った。その結果、「すぐにあきらめやすいー続ける力がある」のみ有意な変化はな

く、その他9項目は企画前よりも企画後が有意に肯定的なイメージに変化していることが明らかになった。

有意な変化が認められなかった項目も平均値として高くなっているため、障がい者へのイメージは全体的に肯定的イメージへと変化していると考えられる(表2)。

表2 障がい者に対するイメージの得点変化



3.3 コミュニケーションの有能感の変化

コミュニケーションの有能感を測定した4因子では、企画の前後ですべての得点が向上していた。事前と事後においてt検定を行った。その結果、自ら積極的に人と関わり明るい雰囲気を作っていく行動特徴に関する内容の「社交性因子」($t = -2.55$, 自由度=28, $p < .02$)と、コミュニケーションの送り手として考えや感情を表現できるかどうかに関する内容の「自己表現因子」($t = -2.24$, 自由度=28, $p < .03$)が有意に向上していることが認められた。また、コミュニケーションの有能感を示す総合得点においても有意($t = -2.77$, 自由度=28, $p < .01$)に向上していることが明らかになった。一方、相手の気持ちや周囲の状況に意識を向けることに関する内容の「相手志向性因子」と傾聴の姿勢を表す内容の「傾聴因子」の得点は向上したものの、有意な差は認められなかった(表3)。

表3 コミュニケーションの有能感各因子の得点変化

	事前	事後	t値	p値
社交性因子	18.24	19.38	2.55	.02 *
	3.76	3.37		
相手志向性因子	19.21	20.07	1.91	.07
	2.74	2.53		
自己表現因子	9.97	10.90	2.24	.03 *
	2.61	2.85		
傾聴因子	10.83	11.17	1.31	.20
	1.14	1.04		
総合点	58.24	61.52	2.77	.01 *
	8.06	8.09		

上段: M, 下段: SD * p < .05

4 考察

障がい者スポーツへのイメージならびに障がい者へのイメージは、企画の前よりも後の方が有意に肯定的なイメージへと変化していることが明らかになった。有意に変化しなかった項目は事前調査の段階ですでに肯定的な回答結果が得られていたことから、それ以上の変化は認められなかったものと考えられる。障がい者に対する偏見は、直接的な接触の機会が少ないことから「わからないから不安を抱く」状況が発生していると考えられる。今回の企画において、授業内での情報提示のみならず、1日という短い時間ではあるが、直接的な触れ合いを通じたことで肯定的なものへと変化したものと考えられ、先行研究を支持する結果となった。しかし、今回の調査対象者は、自ら企画のスタッフとして参加したいと望んだ学生が多かったため、企画前の段階からあまり否定的なイメージを抱いてはいなかった。今後、授業や企画に参加していない学生が持つイメージとの比較検討も必要だと考える。

コミュニケーションの有能感に関する尺度では、企画前よりも後の方が「社交性因子」と「自己表現因子」の得点有意に向上し、「相手志向性因子」と「傾聴因子」の得点は向上したものの有意な差は認められなかった。これらの結果から、今回の企画を経験したことによって、自発的なコミュニケーションに関する有能感が向上したと考えられる。回答者の感想からは、「障がい者の方とコミュニケーションをとることに始めてはとも自信がなかったし緊張していたけど笑顔で接してみたら思ったよりも全然簡単にコミュニケーションがとることができて、とても楽しかった。」「自分が伝えたいことを手のひらで書いてしか伝えることができて最初すごくとまどったけど段々伝えることができてとてもうれしかった。」などもあった。聴覚障がいの参加者の方も多かったため、学生は自ら筆談や手話を覚えながら積極的にコミュニケーションを図る必要性を認識することで、自発的なコミュニケーションに関する有能感が向上したと考える。

また、障がい者スポーツや障がい者に対するイメージが肯定的に変化することによって、対象に関心を持つことになり、その結果コミュニケーションをとる意欲の向上につながると考える。

本研究においては、スポレクチャレンジの企画を通しての変化を検討したが、高齢者や子どもなど他の企画においてもスタッフとして参加することは、積極的かつ自発的な行動が求められるため、コミュニケーションの有能感が向上すると考えられる。本調査からは、障がい者スポーツの企画において障がいのある人と触れ合うことによる特異的な変化を明らかにすることはできなかった。また、対象としたスポ・レクチャレン

ジがたった1日の開催であること、1つのプログラムにおいて得られたデータのみを扱っていることが挙げられる。そのため、本研究の結果を過度に一般化して理解することは難しいかもしれない。ただし、障がい者スポーツへのイメージならびに障がい者へのイメージは、企画の前よりも後の方が有意に肯定的なイメージへと変化していることが明らかになったことで、本研究は重要な示唆を含んでいると考えられるが、課題も多い。

積極的かつ自発的な行動やコミュニケーション力は、社会人として求められる「社会人基礎力」に含まれている。

今回のイベントにスタッフとして参加した学生のコミュニケーション有能感や障がい者へのイメージが肯定的に変化したことを「社会人基礎力」が身に付いたと考えるならば、今回のイベントは大学教育としての役割を果たせたのではないだろうか。さらに、これらの活動が大学での学修と繋がるようにプログラムする必要があると考える。

5 まとめ

中部大学にて開催された障がい者スポーツイベントのスポ・レクチャレンジにスタッフとして参加した学生を対象に、障がい者スポーツや障がい者に対するイメージが企画の前後で肯定的に変化するか、また、積極的なコミュニケーションの機会によって、コミュニケーションの有能感が変化するかを検討した。

その結果、障がい者スポーツならびに障がい者に対するイメージは、企画前よりも企画後の方が肯定的なイメージに変化していた。今までに障がいのある人と直接触れ合う経験がないことから、勝手に否定的なイメージを抱いており、直接触れ合うことで障がいのある人を理解することにつながり、肯定的なイメージに変化したと考えられる。

また、自ら積極的にコミュニケーションをはかる機会からコミュニケーションの有能感にも変化が見られた。企画後の方が4因子の得点が向上していたが、有意な変化が認められた因子は、「社交性因子」と「自己表現因子」で、どちらも自発的なコミュニケーション

に影響する要因であった。

今回のイベントに参加した学生たちが、今後の学生生活の中で様々な人と触れ合い、自発的なコミュニケーション能力や相手を思いやる心を育むことができるよう今後も多様な経験や継続的な経験が必要だと考える。大学を取り巻く環境や大学の社会貢献に対する意識が変わり、学生のボランティア活動を大学の教育プログラムとして認めようとする動きが広がり始めている。大切なことは、ボランティアに参加したことが認められれば単位を付与するというものではなく、ボランティア活動が、学生の人間的成長を意図した教育活動として意義を持つプログラムづくりにあると考える。本研究を基に、日常生活では得られない一つ一つの経験が人間性を豊かにするプログラムを考えたい。

引用・参考文献

- ・川間健之介（1996）障害をもつ人に対する態度－研究の現状と課題－. 特殊教育学研究, 34(2), 59-68.
- ・松本耕二・田引俊和（2009）障害者スポーツをささえるボランティアからみた知的障がい者のイメージと日常生活における意識・態度. 山口県立大学学術情報（社会福祉学部紀要）, 2, 27-38.
- ・松村孝雄・横川剛毅（2002）知的障害者のイメージとその規定要因. 東海大学紀要, 第77輯, 101-109.
- ・齋藤まゆみ（2008）A県小学校における障害のある児童の体育実施状況. スポーツ教育学研究, 27(2), 73-81.
- ・田中淳子・須河内貢（2004）知的障害者に対する援助経験による態度変容に関する基礎的研究. 岡山大学・岡山短期大学紀要, 27, 59-67.
- ・山内隆久（1996）偏見解消の心理－対人接触による障害者の理解－. ナカニシヤ出版. 京都.
- ・吉岡尚美・内田匡輔（2008）障害のある人と「障害者スポーツ」に対する体育学部生の認識の変化に関する調査－「障害者スポーツ演習」の試みと効果－. 東海大学紀要体育学部, 第37号, 21-27.
- ・吉岡尚美・内田匡輔（2010）体育学部生の障害のある人とスポーツに対する変化について－第2報－. 東海大学紀要体育学部, 第39号, 69-74.

助 教	生命健康科学部	スポーツ保健医療学科	西垣 景太
助 手	看護実習センター		上田ゆみ子
講 師	生命健康科学部	スポーツ保健医療学科	藤丸 郁代
准教授	生命健康科学部	生命医科学科	伊藤 守弘